

外堀跡

外堀は日本の城の共通の特徴であり、防御構造と輸送のための水路としての二つの役割を担ってきた。彦根城の3つの同心円状の堀は、近くの水域である琵琶湖からの水路の水で満たされていた。これらの堀は、城の建設の一環として着工し、1622年までに完成した。堀に水を供給することに加えて、城下町と湖を結ぶ水路は、彦根の経済に多くの利点をもたらした。それは、すでに商品、または軍隊の輸送に広く使用されていた湖への直接的なアクセスを可能にし、井伊家の藩主たちは船で城に出入りすることもできた。

彦根城の3つの堀は、城下町の住民を文字通りの社会的な階層に分割した。江戸時代（1603-1867）、社会的階層における人の居場所は、城からどれだけの堀によって隔てられていたかによって決まっていた。城郭と藩主の住居は内堀の内側にあった。中堀には、公式の建物と、彦根藩の上級家臣団や管理階級の武士達の住居があった。商人と職人の住居は外堀の内側に、下級武士と足輕の住居は外堀の外側にあった。